

平成23年度 学校評価結果報告書

(1) 学校教育目標	1 自主的精神に充ち、豊かな教養を身につけた人間を育成する。 2 個人の価値を尊び、敬愛の念をもち、協調性に富む人間を育成する。 3 常に全体の一員であるという自覚をもち、責任を重んずる人間を育成する。 4 心身の健全なる発達を図り、公正なる判断力を養い、進んで実行する人間を育成する。
------------	--

(2) 現状と課題	1 本校は、上級学校進学率が8割を超す県内有数の進学校であるが、地域社会を牽引するリーダーの育成や医師不足対策など、県が抱える課題を克服するために、難関大学及び医学部医学科等への合格者増が期待されている。 2 スーパーサイエンスハイスクール(SSH)事業においては、これまで多くの成果を上げてきたが、今年度継続7年目を迎えたことから、より一層事業の改善・充実を図る取組が求められている。
-----------	--

(3) 重点目標	1 授業の充実
	2 当たり前のことが当たり前ができる心身共に健全な生徒の育成
	3 生徒の進路志望達成
	4 スーパーサイエンスハイスクール(SSH)事業の積極的推進

(4) 結果の公表	学校ホームページ上で公表する他、来年度のPTA総会で報告する。
-----------	---------------------------------

	学校番号	16
学 校 名	青森県立八戸北高等学校	
制課程	本校 校舎 ・ 分校	

自己評価実施日	平成24年 2月14日(火)
学校関係者評価実施日	平成24年 2月16日(木)

(9) -イ 学校関係者評価委員会の構成
学校評議員4名 保護者(PTA会長、PTA副会長3名、PTA母親委員長)5名 計9名

自 己 評 価					学校関係者評価	次年度への課題と改善策
番号	(5) 評価項目	(6) 具体的方策	(7) 具体的方策による目標の達成状況	(8) 目標の達成度	(9) 学校関係者からの意見・要望・評価等	
1	基本的な学習習慣の育成と45分授業の有効活用	授業を通して、生徒に対して課題提出の徹底や予習・復習の習慣付けを図る。 授業方法を工夫するとともに、完全授業やベル開始授業など授業時数を確保する。	各学年とも、生徒個々の成績が課題や添削等の提出率とリンクしており、提出の習慣化が学習定着度に大きく影響している。同様に家庭学習時間の量が、成績に反映されており、正に量と学力は比例関係にある。ベル開始授業は全学年ともかなり徹底されており、45分授業が有効に活用されている。	B	学校行事の中に、先生と生徒の関わりを深める心と心の触れ合いの場を設けてもらいたい。45分授業に関しては、部活動時間確保さらに文武両道実現のため、短時間での集中力育成を期待している。読書推進のため、図書館活動の工夫もお願いしたい。	・生徒個人の進路と能力に応じた学習指導の徹底を図るために、学力向上委員会等を有効に活用する。 ・生徒との交流を視野に入れた「特別活動」や「総合的学習の時間」の計画改善に努める とともに、授業において誤解を生じるような不適切な言動は慎むように指導する。 ・相互参観授業の時期を設定するなど、授業力向上に資する施策を実行する。
	教師の授業力向上	指導内容の重点化や教材の精選・工夫に努め、授業のねらいを明確にする。 研究授業、授業公開、相互参観授業を実施する中で、教師としての力量を高め合う。	研究授業、予備校研修、進学先進校視察、大学入試問題研究など、授業力を高めるための自己研鑽に意欲的に努めている。相互参観授業については、自教科の参観は概ね実施しているが、他教科の参観は極めて少ない。	B	授業力というよりも、教師側の不適切な言動を危惧している。先生の好き嫌いが学習意欲に直結している。先生に文句が多いのは当然で、要はそのことに対する親の態度が肝心なのではないか。	
2	基本的生活習慣の確立と生徒の安全確保	基本的生活習慣の確立のため、全教職員共通理解のもとで連携した指導を行う。 年間を通じた登校指導、全校一斉服装検査等望ましい生活態度の育成に取り組む。	毎朝、全教職員が交代で挨拶や服装の指導を行っている他、すべての教育活動で場面指導を展開している。挨拶や服装に関しては一定の成果は上がっているが、自転車の運転マナーや歩行マナーの悪さに対する外部からのクレームや携帯電話の不適切な使用など、安全確保のためのマナー・ルールの徹底が課題として残っている。	B	学校側の生活指導が漠然としており、服装・頭髪・持ち物・制服の衣替え等の細かい規定を、入学時に保護者に伝えるようにしてもらいたい。自転車の無灯火等、非常に危険な場面が心配である。家庭の躾と学校の生徒指導の区分けをしてもらいたい。	・学校における各種生徒指導の実態が、保護者の方々に伝わるような改善を行う。 ・インターネットに関わる犯罪を未然に防止する啓発活動に意欲的に取り組む。加えて、携帯電話の使用規定の見直しを行う。 ・いじめなど問題行動に対するアンテナを張り、早期対応に努める。 ・カウンセリング委員会を定期的に開催し、不登校等悩みを抱える生徒の支援活動を充実させる。
	心身共に健康な生徒の育成	個々の生徒が抱える問題を、学年や分掌等と協力し、組織的に対応する。 ほけんだより等で情報を提供し、心身の自己健康管理の啓発を図る。	心身不調はじめ何事も早期発見・対応が大切であるとの共通認識のもと、保護者・関係分掌および各委員会との連携を円滑にすることができた。不登校気味の生徒に対しては、状況に応じてカウンセリングや別室での課題指導等の対策に努め、何人かはホームルームに復帰した。	B	かつて学校において切磋琢磨することが人づくり教育に大切なことであったが、今は家庭環境や親の期待度が大きく変わっており、十分な配慮が必要になっている。悪く思われるくらいが当然、卒業後に理解する時がくる指導も大切なのではないか。	
3	難関大合格プロジェクトの推進	県支援事業や先進校視察等を通して、本校独自の有効なプログラム開発を目指す。 難関大を志望する母集団の拡大と意識高揚のための施策を推進する。	各学年・教科毎に、講習・添削・講演会等難関大対策に意欲的に取り組んでおり、徐々に効果が現れてきた。しかし、学年間の縦の繋がりが幾分希薄で、理想的な組織力向上には至っていない。なお、東大入試問題研究等の新規企画が、教師側の意識改革と授業力向上に繋がるものと期待できる。	B	難関大添削の他に、テスト等を併用しているようだが、指導方針や体制がはっきり伝わってこない。指導法が学年によって異なっている感じを受ける。大学進学指導を通じて、社会常識や幅広い知識を養成する指導をお願いしたい。	・進学先進校の取り組みを参考にして、3年間を見通した本校独自の効果的な進路指導プログラム開発を継続する。 ・県支援事業の効果的還元を目指し、特に1学年を対象とした早期指導の充実を図る。 ・キャリア教育を踏まえた上で、人間力向上を目指した大きな進路指導の流れの中に推薦・AO指導を位置づけ、有効な方策を実践する。
	推薦・AO入試の合格率向上	推薦規定や指導計画の改善を図り、全校体制で戦略的に臨む。 情報収集に努め、個々の指導記録を整理し、より効果的な指導体制を構築する。	様々な改革を断行したが、日程的に実情に沿わない部分等が露呈し、再検討の必要性がある。しかし、推薦・AO入試において国立大医学科2名および東北大6名合格は、過去最高数であり、当初の目標は十分に達成できた。特に、SSHコース生の健闘が目立つ結果だった。	A	進学実績ではなく、視点を変えて進学率で見ると、他校に比べ少し見劣りする。面接・小論文・志望理由書作成の推薦・AO指導は、社会人としての自己表現力等を養う上で、とてもプラスになる。	
4	2期目2年目のSSH事業及びコアSSH事業の推進と成果の普及	昨年度2期1年目のSSH事業及びコアSSH事業の成果を踏まえ、事業効果が最大限発揮される指導計画を立てる。 事業評価を的確に行うとともに、その成果の普及に努める。	SSH本体事業において、昨年度新規に実施した1年次生全員を対象とした科目「SSアクティベイト」が科学的知識を得る機会として定着している。コアSSH事業では、本校が中核となって全国20校がゲンジポタルに関する共同研究を行い、新聞やテレビに取り上げられるなど高い評価を得ている。また、研究成果や情報の発信に努め、本県のSSH事業をリードしている。	A	これ以上ない実績を上げている。SSH事業はとても魅力的な企画が多いのに、SSHコース生の中に若干その趣旨を理解していない消極的な者が見受けられ、残念である。	・今年度の各種事業のアンケート結果等を踏まえ、より費用対効果が得られるように事業精選や実施時期変更にも努める。さらに、次年度以降も改善点の検証を行い、より良いものを目指していく。 ・授業進度や部活動への影響を緩和する手立てを講じ、共通理解のもと校内支援体制をより堅固なものにする。 ・SSHコース生の事業認識を高める施策を検討し、事業実践に活かす。
	校内支援体制の確立	事業目的について共通理解を図り、全教職員による協力体制を整える。	関係分掌および教科主任計17名で構成されるSSH推進委員会は、定期的を開催され、事業目的に対する共通理解と協力的体制構築の場として十分に機能した。とりわけ1年次ディベートや3年次英語による課題研究発表では、改善策が有効に働き、組織力が向上してきた。しかし、日程の過密化や事業に対する生徒の認識不足などが課題として残った。	B	今後とも、SSHコース生に限らず、一般の生徒への拡大をお願いしたい。どんどん学校全体にアピールしてもらいたい。教師・生徒とも過重な負担というイメージがあるので、時間の有効な使い方を検討してもらいたい。	

総括	・東日本大震災の影響が残る中、スタートした年度であったため、危機管理に対しての学校の姿勢が問われることが多かった。自然災害に限らず、教職員の危機管理意識の醸成が喫緊の課題として残った。 ・難関大学や国公立大学医学科の合格者が過去最高になったが、反面、心の病を抱えた生徒への対応にも追われた。学校関係者評価委員からの意見・要望を十分に検討し、より良い学校運営を実現するため、今後とも努力を継続していきたい。
----	---